
聖ボンガリアル学園リターンズ

アジマス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖ボンガリアル学園リターンズ

【Nコード】

N7707D

【作者名】

アジマス

【あらすじ】

ある事件が過ぎて、ポコは平和を謳歌していたしかあし！ラブコメたるものこんなものじゃおわらねえ！本作品は聖ボンガリアル学園の続編ですそちらをまずお読み下さいアジマ先生の作品です、アジマ先生は家庭の事情で執筆を断念しましたので私が受けつぎます

ポコと旅行と揺れるメロン（前書き）

注：メロンは想像に任せます

ポコと旅行と揺れるメロン

僕が退院しても、他の生徒達は重傷だった…

へ？なんの事かって？そもそも僕は誰でこの世界はなんだって？
説明が遅れたね

ここは違う未来を生きた地球、科学ではなく、魔導が発達したんだ
もちろん、車だってあるし、電気みたいな物もある

ああ、僕はポコ！魔導八賢者と呼ばれる大魔導士
昔、世界を救った事もあるんだ

でも…僕が居る学園の生徒達は守れなかったんだ…

生徒達の大半は弱り、入院している

体内の生命エネルギーが枯渇し、死にかけた者もいた

学園は休校状態、そのまま夏休みに突入した

そして僕ら、友達の茶癒、双葉、ミーナ、真とともに旅行に来ていた
「でさあ…ポコったらさあ…」

双葉が僕の昔の失態を楽しそうに話している、正直恥ずかしいから
やめてほしい

魔道電車は一定のリズムで揺れている

「…ポコ、どうした？」

茶癒が僕を見つめながら呟いた、いや、あれはちゃんと話している
のだろう

「なんでもないよ。ただ眠いだけ」

僕はそう答え、窓の外の景色を眺めていた

どこにいても廃墟廃墟廃墟…前の魔道大戦の傷跡が癒えていない
のだ

「そう」

茶癒はそれだけ言うとジュースをストローで啜っていた

電車は進み、僕たちは目的の海辺へと着く

先に旅館へチェックインし、僕たち…と言っても僕と真だけだが、先に水着に着替えて海へと急ぐ

シートを敷き、パラソルを立てて準備完了といったところで双葉たちが来た

「お・ま・た・せ〜」

双葉はボンキュボンのスタイルでグラビアのようなポーズをとりながら言う

うん、目のやり場に困りますね

しかし、こんな美人たちを周りのナンパ野郎どもがほつつておくわけなく

「ねえねえ、かわいいねえ…どこから来たの？」

なんて声をかけている

三人の対応をみてみよう

「うるさいな、どこでもいいでしょ？とっとと消えなさい」

きつい一言をお見舞いしているのは双葉

あ！逆上した男が双葉をつかもうとして…殴られた！

双葉はハンマーを召喚し、思い切り殴っている

男が動かなくなったのを見て、こちらに来た

一方茶癒は、しつこく話しかけられてもスルーしている、男はしつこい

茶癒がプルプル震えて…銃を取り出した！うおー！！ぶっ放している！！

男たちが逃げる逃げる

まあ…大丈夫だろう

んで…ミーナは…

あ！男に腕を引っ張られてる！…微動だにしませんよ、ミーナそりゃそうか、神聖科の生徒だもん

身体能力じゃ勝てませんよ

男はあきらめてスタスタと帰って行く
恐ろしい

「じゃあ、気を取り直して…泳ぐかい？ポコ」

真が微笑んでみせた

無駄に輝く歯が見える

「そうだね。僕は誰と泳ごうかな？」

- 1 ・かなづちの双葉に泳ぎを教える
- 2 ・泳げるけど泳がない茶癒と浜辺でゆったりする
- 3 ・身体能力抜群のミーナと浅瀬で遊ぶ
- 4 ・真と男の友情を確かめ合う

3…だな…よし

浅瀬で波を叩いて喜んでいるミーナに近寄る

「ミーナ、一緒に遊んでいいかい？」

こつちを振り返ると笑ってくれるミーナ

「はい！ポコ先輩！」

とまあ…遊び始めたのだが…

結構無茶苦茶だった

ナンパ男が連れて来たギャング団を魔法で吹っ飛ばしたり（戦闘時間約2秒）

ミーナが昼ご飯にとマグロを捕まえてきたり（素手で）

双葉が転んで茶癒の水着を脱がしたり（僕とばかり）

真が消えたと思ったら凶悪手配犯を捕まえて警察に表彰されてたり

（海で遊べよ）

そんでもって夕方になる

二手に別れて温泉に入る事にした

「じゃあお風呂でたらみんなでトランプしようよ」

男と書かれた暖簾の前で僕は口を開いた

真は爽やかに笑っている

「そうね、先に出て部屋で待ってなさいよ」

双葉に念を押された

そんなにゆっくり温泉に浸かる訳ではない

「……温泉……」

茶癒はどうやらお風呂好きらしい、無表情に見えるが微妙に微笑んでいる

「温泉？」

ミーナは首を傾げている、まあ温泉を知らないのも無理はない
元奴隷階級だったからね

「じゃあまったねー」

僕は手を振りながら中に入る

服を脱ぎ、腰にタオルを巻き付けて、扉を開ける

温泉には人一人もいなかった

「わー貸し切りだっ」

僕は喜びながら温泉の中にダイブした

「きゃあ！？タオル流れたじゃない！？」

こ…この声は

僕が顔をあげるとメロンが二つ、揺れていた

「…ふ、ふたちや…へぶ！」

「きゃあああああ！！置換ー！」

僕は吹っ飛ばされた、漢字が違うと突っ込みたかったが…
それどころじゃない

「ふ……ポコよ…温泉の事はよく調べような」

真は服すら脱いでいない

つまり、こいつは元々ここが混浴だとしていたわけだ

ボコと旅行と揺れるメロン（後書き）

双葉（以後ふ）「あーアジマが死んでもう何ヶ月かしら……」

茶癒（以後さ）「死んでない死んでない……」

ふ「じゃあどうしたのよ」

さ「自分の文才のなさに嫌気がさしたらしい」

ふ「それじゃあ作られた私達が馬鹿みたいじゃない」

さ「…確かに…まあ…みんなに…言いたい事は」

ふ「ただひとつ！これから応援よろしくね」

さ「……まだまだ…いろいろあるから……」

ふ「そういうこと！じゃーね」

ポコとリンチ（前書き）

初注意：ポコはかわいいです

ポコとリンチ

混浴だったのを知らず突入し、ポコポコにされたポコを引きずる双葉

「……ふたちゃん…そんなに怒らないでよ…」

ポコが宥めるがミーナを除く女性陣が苛立っていた

「ほえ？皆さん？なんでそんなに怒ってるんですか？高々裸見られた位ですよ？」

「そりゃあんたはいいでしょうよ、でも私は嫌なの！」

「……達だ…双葉…」

みんな好き勝手言っている

ちなみに真は既に部屋に帰っている

そして外へ投げられるポコ、目の前には戦闘体制の二人とよくわかってない一人がいる

「ポコ、あんた、いつペン死んでみる？」

冷たい声、これは双葉だ

「……抵抗しても…構わない…」

抑揚のない声、これは茶癒

「え？とりあえずポコ先輩ぶつ飛ばせばいいんですね？」

……これは…ミーナ…マジ勘弁して…

僕はちよろちよろつと呪文を唱える

そして炎を両腕に纏う

身体強化系ブレイズアップだ

「いざ！」

双葉が剣を召喚して突っ込んでくる

鋭い振りを上空に飛んで避ける

しかし上空にはミーナが居た

「は！」

両腕を組み合わせた形にした。ダブルアームハンマーとも言っただろう

それを叩きつけられる

ポコは地面に叩きつけられ、土煙を上げる

「……発射……」

とどめとばかりに茶癒がミサイルの雨を降らせる

炎の魔法で出来た特別な物だ

爆音が響き火柱が上がる

「……この程度なら……僕にダメージは与えられないよ、みんな」

立ち上がったポコは傷一つ負ってない

「頼むから……これ以上攻撃しないでよ……戦いたくなっちゃうからさ」

とか言いながら指からレーザーらしき物を飛ばす

三人の間を摺り抜け、旅館の茂みに当たった

真が黒焦げになりながら倒れ出てきた

「フッフ……よく気がついたなポコ……お前に教える事はなにもな」

そこまで言った所でポコの魔法の段幕が真を襲った

「砕け散れこの外道」

そういつてポコは旅館に戻った

ポコとリンチ（後書き）

フ：双葉と！

サ：茶癒の…

フ&サ：ボンガリアルコーナー

フ：さてさて！また始まったわよ！

サ：…前の作者が私達を見捨ててから久しぶりね…

フ：やっぱあんた暗いわ

サ：…性格だから

フ：さて！みんなが知りそうな事でも話しますか

サ：………うん…

フ：まず一つ目！私のママは誰か！

サ：ちなみに…私と双葉は従姉妹よ

フ：私のママは三柳一葉！とある人と結婚して今は心理のなんたら
かんたらって仕事してるわ

サ：…ちなみに私のママは…内緒だけどパパは亞斗羅龍葉……昔は
三柳龍葉って名前だったみたい…

フ：龍葉おじさん凄く強いよ！

サ：…そんな事はさておき…皆様

フ：聖ボンガリアル学園リターンズをよろしく願いしますね！
サ：…また今度…

ポコと願い？（前書き）

初注意：ポコは可愛い男の子です

ポコと願い？

とりあえず真をのして満足した僕は三人に頭を下げていた

「本当にゴメンね・・・」

ちなみに土下座、かつこよく言うとDOGGEZAだ、べつにかっこよくもなにもないか...

「ボクは別によかったんですけどね」

ならミーナ、殴るんじゃないよ、アハハ、とか笑ってやがりますよ

「...責任とれ」

これは茶癒、責任って・・・賠償金とかかな？

「そうねえ・・・あ、こうしない？ポコが手を出した女の子がポコゲットってな感じで」

僕は景品かなんかかよ、そうツツコミたいことを言っているのは双葉別に景品扱いされようが僕はいいのだが...ん？手を出すとかな？

「あ、いいかも知れません。」

賛成すな

「...ナイスアイデア...」

ナイスでもなんでもないアイデアですよ、茶癒

「でしょ？さあ？ポコ、誰を抱くのかしら？」

「...私を...」

「ポコ先輩！ボク家事とかすっごいできますよ!!」

みんなすっごい詰め寄って来ている

顔がだんだん近寄ってきて怖い...

「...僕は誰も抱かないよ」

ポコはそう言い切る

皆の顔は強張った

誰にも興味はない、そう聞こえる

「僕は皆大好きだ、けどさ。そんなに震えながら言われたら抱く事は出来ないよ」

その言葉に皆、顔を見合わせて笑う

「武者ぶるいです!」

声を揃えるな声を・・・そんなこんなで夜は更けていった

朝となり、ポコは目を覚ました

「……知らない魔力が二つ……神龍とキメラか……朝の体操にちようどいいかもね」

神龍やキメラ…特A級の魔物だ

二体同時に相手となると普通どんな魔術士でも勝てない

しかしポコは古代から現代までの禁呪を全て習得している

こんな奴らなど相手にはならない

「さあ、ダンスのじか…」

「何してるんですか?ポコ先輩」

ポコは油の切れたロボットの様に首を後ろへ回した

そこには熊さん柄のピンクのパジャマを来たミーナが立っていた
寝癖がぴよんとなっている

「おはよう、いやさ、いい朝だから魔術士ダンスでも踊ろうかと…」

…」

ポコは奇妙な踊りをした

ミーナはそれを見て微笑んでいる

コツツと旅館の屋根に雨が当たる

「あうあうあー」

ミーナが空を見上げながらそう鳴く、随分可愛らしい

一気に雨が降ってきた雨は地盤を緩ませ、脆くしていく
ふと思った

(なんで僕は断崖絶壁の上にいるんだろ…?)

音を立てて崩れる崖、ミーナが助けようと飛び込んでくるが

「あっ」

痛そうなお音がしてミーナの頭に岩が落ちた

ミーナは回転しながら地面に落ちて行く

「ミーナ！」

ポコは魔力で加速し、ミーナをキャッチし、頭を抱える

地面はもうすぐ、人間の魔法じゃあもう止められない程の加速が着いている

「ふー…はあ！」

魔力を全力で開放すると地面にクレーターが出来る

体が魔力のクッションでバウンドし、木の上に落ちる

枝を突き破りながら泥と化した地面に叩きつけられる

「ぐっ…！」

ポコは接近戦が得意な魔術士ではない

肩の骨に痺がはいった

「…ミーナ？」

ミーナは安らかな顔で気絶している

頭のタンコブ以外の外傷はなく、なけなしの魔力を通して異常を調べたが

「……無事……かな…ほっ……」

ポコはミーナを抱きしめたまま空を見上げる

（魔術士ダンスって雨乞いの効果があったんだな）

そう冷静に考えながらどんよりした雨雲を見つめていた

続く

と次回予告見せかけまだまだ話を綴る

とりあえず洞窟内に避難して雨止みを待つ

肩が鈍く痛むが気にしない

逆に眠らずに済むから骨折には感謝かもしれない

雨が地面を叩く音が子守歌となつて心地よくなつてしまつかも知れない

ポコは痛みに顔をしかめながらも雨止みを待つ

「……あれ？頭が痛い……」

ミーナが頭を押さえながら体を起こす

意識が戻つた様だ

僕はニツコリミーナに微笑む

「あ、おはよ……ポコ先輩、肩怪我してますよ」

ミーナは不安げに近寄ってくる

外は雨が降っている、ミーナの今の格好は熊さん柄のピンクパジャマ

ズボン無しでなまめかしい脚が見えている

「もう……魔力もすっからかんじゃないですか」

泳唱なしの魔力放出は無駄に魔力を使い過ぎる

そんな事を言おうとしたのだがミーナに馬乗りされる

「今治しますから」

光を放つ半透明の羽が広がる

魔力が集まり、ポコの体の中に１００程の僅かな魔力が流れて来る

ミーナの魔力は５００、これでも一年では多い方だ

「神さま……お願いです、ボクは毎日辛くて構いません……代わりに

この人に幸せを与えて下さい」

羽が眩しく光りポコの肩の傷が治癒して行く

「……その神言、取り消すよ」

そう言つと治癒が止まる

ポコは少し怒っている、今の神言は犠牲の言葉

「そんな事、次したら……僕が君をいじめるからね」

そして神聖魔法のよりどころ、神様に向かって暴言を吐く

「ミーナ不幸にしたら僕がお前ぶっ潰すから」

大戦を幼い体で生き抜いたポコ

その迫力は神など目ではない

「……ミーナ、いつまで奴隷なんだよ……」

少しイラツとした

開放したのはポコ、軍隊吹っ飛ばし、王様半殺してまで開放した

それを踏みにじられた様で悲しい

「ごめん… なさい…… ボク…… ポコ先輩には… 幸せでいて欲しくて」

ミーナは表情を曇らせながら呟く様に言う

「ならまずミーナが幸せになってよ、どんな所でもニコニコ笑って

いられる様にさ」

そう笑顔で言う

ミーナはポコの顔を見て朱く頬を染めた

「… ポコ先輩」

「そう言えば… 君が僕の家に住み着いてから色んな事があったよね」

思い反せば… 大変だった

ポコと願い？（後書き）

ポコ（これよりポ）「えゝ…主人公のポコです、遭難しました」

ミーナ（これよりミ）「ボクのせいです」

ポ「そうでもないよ、では挨拶を…皆さん、おこんにばんわ」

ミ「…なんですか…それ（^ - ^）」

ポ「おはようところんにちはとこんばんはを合わせた新用語！o（^

- ^）o」

ミ「……そう言うのするのボクじゃ…」ポ「気にしたら負けだよ、とにかく、これから」

ミ「聖ボンガリアル学園リターンズをよろしくね」

ポコとミーナ思い出編1、ミーナルートスタート（前書き）

ミーナ編スタートです

ポコとミーナ思い出編1、ミーナルートスタート

春の頃、ミーナが家にやってきた
というか僕が無理矢理住まわせた
そりゃあ朝助けて貰った恩人の家に残飯貰いに来てたら流石に可哀
相すぎる

あの頃のミーナは痩せ細り、薄紫髪の毛は延び放題
素足でポロボロの制服を着ていた

それで人間としての作法を教え、餌付けし、魔法の基本を教えた
ミーナは驚く事に独学と才能だけで強化魔法、回復魔法を覚えた
ミーナは元奴隷階級

物を買う事も売る事も禁じられている、破った場合は三日間の【査
問】にかけられて処刑される

【査問】は名ばかりの拷問だ、生皮を剥がされ、肺と心臓だけにな
った所を公開処刑

前々から気に入らなかったからミーナの事で言い掛かりをゲットし、
軍隊全てを吹っ飛ばし、権利を勝ち取った

(ただの力押しだったが)

妖精族の特徴を持っていたから妖精かと思ったたら案外デルヒイン、
悪魔と吸血鬼のハーフだった

ミーナは吸血衝動はなく、代わりに盛りがつく
凄く大変だった

そんな思い出…居候したばかりの頃の思い出を語ろうと思う

「ポコ様」

ミーナがワイシャツだけの姿で歩き回る

「ポコ様じゃなくて……他の呼び名ないかな？」

僕はそれをみて頬をポリポリ掻く、ミーナは僕をみるとニツパと笑い可愛い足音を立てて寄ってくる

「ポコ様、お腹が空きました!」

腕にしがみついてご飯をねだってくる

てことはもうお昼らしい

「わかったよ、カレーでいい?それとポコ様はやめて…」

「はい♪なんでもいいですよ、ポコ先輩」

ポコ先輩、悪くない響きかもしれない
なぜなら僕は他の後輩やら何やらには

「きゃーポコちゃんだーかわいい」

とか言われているからだ

至極屈辱だった

「うん、おいしいーの作ってあげるからね」

僕がそう答えるとミーナは微笑み、僕の料理の手をじっと見つめていた

そんなにお腹空いたのかと言えば別の話

これはただ僕の技術を頂いているだけ、授業料が払えなく、授業が受けられないミーナは学園でもそうやって勉強してきたとか

そしてミーナの家事の腕が僕を越えるのは後少し先の話

料理をちゃちゃっと作るとミーナはテキパキ動いて皿と箸を用意した

「ミーナ、これは箸じゃなくてスプーンで食べるんだよ」

僕がそういうとミーナはコクリと笑顔で頷いてスプーンを用意してくれた

夕飯が始まり、ニコニコしながらミーナは箸を進める、まあスプーンだが

「かれえって美味しいですね」

語尾にハートマークをつけてそう語ってくれる

かれえ、少し妖精鈍りが入り、幼く聞こえる

食べ終わってしばらくするとミーナに異変が起きた

体をモチモチさせている

「どうしたの？」

僕はそう尋ねてみた

顔を紅潮させ、明らかに様子がおかしい

何かの病気だったら大変だ

「あの……その…ポコ先輩…ボクと……一緒にお風呂入りませんか？」

その言葉に僕は神妙に考え……考え……

「っってお風呂お！？一緒に！？裸で！？」

僕は先程食べたかれえを吐き出しそうになった

ついでに僕にも鈍りが入った

「はい……その…」

モチモチする、ミーナがすっごくモチモチする

「いじめて欲しいんです……」

だめだー！

僕の理性があー！人類最後の良心と言われた僕の理性があー！

僕が頭を掻きむしっていると頭に何かが乗っかる

…Yシャツと下着デイスカ？

「…お願い…します」

駄目だって！18禁小説になるー！って僕は何を言ってるんだ！

Cサイズの二つ丘が揺れて迫ってくる

頂上には小さなさくらんぼが…

「それは駄目だって！【マッスルス。ーク】！」

…… やってしまった

まさか女の子に筋肉なんかの三大奥義をかけてしまうなんて…

とりあえず魔法で服着せよう

後々調べでわかったのだが妖精族、または吸血鬼族は月に一度発情期があるらしい

しかもそれは信頼出来る異性が近くにいと起こるらしく、ミーナ

にとつての初の発情期かも知れなかった

……僕もそれなりに信用されてたらしく少し嬉しいのやら悲しいのやら……

続く

ポコとミーナ思い出編1、ミーナルートスタート（後書き）

双葉「……あーあ……ミーナ編入っちゃった……」
これよりフ

茶癒「……私達更に影薄くなる」
これよりサ

フ「あーあ……ポコ殺ってきていいかな？」

サ「……話が終わる」

フ「それもそうよね……」

フ&サ「はあ……」

ミーナと思い出と捕食者（前書き）

注：途中で文が消えました
まじうざいです

ミーナと思い出と捕食者

さて、思い出の続きを話そうか

後々聞くとミーナはなんと英雄の血筋らしい

三柳龍葉、ミーナの父に当たる人だ

10年前の大戦でたった一人で悪魔王と悪魔十二神将と戦い、打ち勝った男だ

10年前の大戦は魔王軍、悪魔軍、神人軍連合との戦いだった数、強さで圧倒する奴らはめちゃくちゃに強かった
たった三日で国と言う国は焼け、森が消えていった

各国の首脳は降伏しようとした最後の砦がある南極で話しあった
その時、ある情報が入ってきた。オーストラリアを奪還したという情報だ

たった13人のレジスタンスが神人のオーストラリア司令を倒したのだった

レジスタンス、処刑人のリーダーが南極に現れ首脳陣と話しあった

リーダーの名前は一葉

英雄龍葉の妹君だった、銀髪で紅の瞳…そして慈愛に満ちた美しさは勝利の女神と思わせる程だった

それから一年で全大陸を取り戻し、最後の総司令魔王を英雄達と八賢者…つまり僕らが討ち取り、大戦を終了させた

「龍葉さんか…龍葉さんは…どつたの？」

子供に溺愛していた龍葉、その子供は僕の…一つ下の子供だったからよく遊んだ

「……世界政府に英雄殺しで殺されちゃいました」
その言葉に僕は頭を鈍器で殴られた様な感じた

英雄殺し、小さな子供でも持てば英雄を殺せる固定概念武装だ

「本当…だよ…」

龍葉とは中々仲が良かった、というか親のいない奴隷人間を面倒見てくれた

「はい…パパ死んじやいました」

それからミーナが話してくれたのは殺した相手に捕まった事、奴隷として金持ちに売り飛ばされ慰み物になっていた事

その金持ちは大分好色らしく、ミーナ自身も心と体に深く傷をおったみたいだった

「よし、ミーナ。僕が絶対幸せにする、毎日がニコニコ笑っている様に…君を幸せにする！」

一大決心とでも言うのだろうか、今まで不幸な人生を送っても笑顔の仮面を被って来たのだ

それなら残りの人生は最高の幸せを贈り届ける

「…はい！幸せにして下さいね…ポコ先輩！」

とまあ、この話はここで終わるのだが

約束通り、最高の幸せを届けている

「あの…ポコ先輩………なんだがドラゴンが洞窟の前にいるのですか…」

肉を見る目でドラゴンがこちらを見ている、先程感じとった神

龍だ

「……あー…僕たち食べても美味しくないですよ？」

ーグガアアアアーー

「きゃああああー！」

二人で同じ悲鳴を上げて洞窟から走りさる、今ならミーナの身体能力と互角だった

「ポコ先輩！魔法でやっつけて下さい！」

「ムリムリムリ！魔力100じゃどんな魔法も効かないよ！」

会話しながら走る、神龍は速い、土地に染み込んだ魔力でぞだつた半径1mの大木を薙ぎ倒しながらも追い付いてくる

「しかたない！足止め〜！【詠唱破棄】【底無し沼】！」

ポコの後ろの地面が底無し沼と化す、神龍は体を沈めて…

「と、飛びましたよ！ポコ先輩！」

「そして…ブレスだあ！死ぬ〜！死んじゃう〜！」

神龍は羽ばたき、息を吸い込む

そして吐かれる高熱のブレス、それは二人に襲い掛かる

「ミーナに攻撃すんな！」

ポコがミーナに覆いかぶさり、庇った

「ああああああ〜！」

ポコの体が焼かれ、爛れ、腐り、焦げる、肉の焼けた匂いがミーナの元へ届く

「あ……ポコ先輩…？」

ミーナは両腕を広げて自分を庇ったポコをア然と見つめていた
「あつち〜」

あつち〜じゃねえよ、皆そう思っただろう。しかし、ポコは既に限界だ

膝について荒い息を吐く

「あ…あ…ポコ……先輩…ポコ先輩！死なないで下さい！」

ミーナはパニックになり、ポコの体を揺する

火傷で爛れたポコの皮膚に響く、その痛みが堕ちかけの意識を戻す
「！危ない！」

ミーナを突き飛ばしたポコの体は鞠のように吹っ飛ばされた
神龍の尾による一撃、戦艦の主砲が人間に直撃したような威力

の一撃だ

「ポコ先輩ー！」

ミーナの悲鳴を聞いてポコは意識を失った

ポコ先輩が…倒れた…早く…治療しないと…

「許さない……許さない許さない！ボクの大好きな先輩を！何故！」
魔力が吹き上がる、一つある疑問があった

何故、英雄二人の子供であるミーナが、【たった】500程の魔力しか持っていないのか

それは英雄の魔力ではなく、ミーナとしての魔力だとしたら……英雄の魔力が体のどこかに閉じ込められているとしたら……どうなるだろう？

「ふう……」

ミーナの魔力はこの時点で10000もある

しかしそれでも片鱗なのだ、英雄の血筋は恐ろしい物だ

「行きますよ」

魔力で強化された身体能力、手足は尋常ではない威力を誇る

神龍の顔をミーナがぶん殴る

神龍の顔が歪み、タングステンを越える硬度の骨が砕ける

「やああああああ！」

腹下に入り込み、どんどん拳を叩き込む、タンカーより重い体は攻撃を受ける度に空中へと浮いていく

「行きます！【ミーナ式プロトクラッシュバスター】……！」

脚で首をクラッチし、体を垂直にし、羽で弾丸のような回転を加え、加速を上げて地面に落ちて行く

「砕けて下さい！」 その副産物で竜巻を産みだし、その竜巻はミーナを更に加速させる

地面に叩きつけられる神龍、これで完全に絶命したがミーナは

確認せずにポコの元へ駆け寄って行く

「あ…生きて…ます…ポコ先輩…」

先程の技でほとんどの魔力を威力に費やしてしまった

ポコに残りの魔力を費やし、回復させる

「絶対…助けますから…」

続く

ポコと齒車の友人（前書き）

注：ミーナ編関係ないです

ポコと齒車の友人

「あ…ポコ先輩…」

僕が目を開けると、そこにはミーナの顔があった。心配している、目に涙をためて青い顔でこちらを見つめている、僕は心配をかけぬように笑顔をみせた。そういうと

「おはよう、ミーナ…僕は生きていたんだね」

血が足りない、貧血でクラクラする。それでも笑顔は消さない、ミーナに心配をかけるのはイヤだ。これはポコとしてのミーナへの配慮だったのだが逆に心配をかけてしまう、

僕は情けない。

「ゴメンね…心配かけて…」

そういうと、ミーナは首を横に振った。全然へいちゃらですと、寂しかったなんて言いませんよーっと目が語っている

「くすす…ミーナは可愛いね…」

その言葉を聞いただけでミーナは赤くなる、本当に可愛すぎる、食べてしまいたいくらいに

「あうあう…そんな…ポコ先輩の方が可愛いです…」
逆に僕にとってその言葉は蹴っ飛ばされたアルミ缶位凹む一撃だった

「可愛くなんかないやい…僕は男の子だし…女装なんかさせるんじゃないやい」

ミーナから見ると僕は負の(?)オーラを出して隅に座っているだろう

「あ、あの…」

ミーナが困っている

「僕はどうせシヨタですよ…あーあ…ミーナはいいよね…女の子で可愛くてスタイル良くて」

なんだがブラックポコと呼ばれそうな感じた

とりあえず今の僕はネガティブキングであろっ、ネガティブ
♪ネガティブ♪インディアン♪いや、訳わからないか
「とりあえず僕は男の子な訳ですよ」

ミーナが更に困っている、気にしない、気にしたらダメだジヨ
二ー…… って訳わからないか
「そんなに気にしないで下さいよ……」

ミーナが申し訳なさそうに目を伏せている 僕はミーナに笑
いかける

「冗談だよ、そろそろ行こうか」
ミーナに肩を借りて洞窟の外へと出る、雨が降る中、マントを着
た男がこちらを見つめていた

知っている雰囲気男だ、そして僕は思わずソイツの名前を読
んでしまった

「^{ハガネ}葉銀君？」

ソイツはマントのフードを取り姿を見せた
「ああ、久しぶりポコ」

クシャクシャの銀髪に鋭い目つき、紅の瞳

三柳双葉の兄、三柳葉銀だ

「ふたちゃんが探してるよ？ 帰らないの？」

僕がそう聞くと葉銀はフードを被り直す

「まだ帰る訳にはいかない、お袋に殺されるしな」

僕はその言葉に含み笑いをする、彼はそれをみて微かな笑みを
浮かべ背を向けた

「フフッ…… 俺の代わりに守ってくれよ、ポコ」

ぬかるんだ地面にも足を取られず、そう言い放ち、歩き出す

「うん… 必ず守るから…… 早く一葉さんとふたちゃんに顔を見せて
あげてよ」

その言葉に彼は片手を挙げて去って行く
自分の運命に逆らう為に

「さ、僕らも行こうか、ミーナ」

そして僕らも歩き出す、彼と僕、違う運命を共にした親友同士
彼の約束は守る、そして、彼も約束は守るだろう
その日を信じよう

余談ではあるが、帰ったら一葉さんが旅館で待っていた

ポコと齒車の友人（後書き）

どもども、方位磁針です

今回も見ていただきありがとうございます

そしてお願いなのですが…

感想を書いていただきたいんです

どんな感想でも構いません、お願いします

ポコとミリーナの脱出劇 + 2 (前書き)

プラスです

ポコとミーナの脱出劇 + 2

そこに待っていたのは三柳一葉

昔世界を救った英雄の一人、レジスタンスのリーダーその人だ

「あ、一葉さん」

僕が声をかけると一葉はニッコリ微笑んで会釈してくれた

「……………」

ミーナは恐ろしい形相で一葉を睨んでいる

一葉は笑顔のままミーナに近寄ると刀を引き抜いた

「ちい！」

僕が間に入り、その刀を弾いた

一葉は微笑んだまま、僕の頬に一筋の亀裂が生まれる

「ミーナに何をする……英雄三柳一葉」

一葉の笑みが消え、般若のような顔になる

「そこをどきなさい！ポコ！」

一葉がかけて来る

そして一撃、僕はかわしたつもりだった

「あ……………」

僕の体が崩れ落ちる、下半身は立ったまま、そして僕はその下半身を見つめていた

「さあ…美奈ちゃん、貴女の番ですよ。罪を償いなさい」

そう聞こえた、そんな事はさせない

「古の精霊イフリートよ……業火を持ち我が敵を滅つせよ……【紅蓮浄土】」

僕の口から大量の炎が発射されて三柳一葉を押しして行き、そのまま彼方にある山まで飛ばして行く、そして僕の意識が落ちていった

目覚めたのはある一室、僕の上半身と下半身は繋がっていた

僕は鎖で両手両足を別々に繋がれていた

隣からクスクス泣く声が聞こえる

「…ミーナかい？」

隣で泣いていたのはミーナだった、こちらを振り向くと手錠をかけられ、繋がっている鎖を引きずりながらこちらへ来た

「はひ！ポコへんぱひ、目ふぁはめたのへふね？（はい！ポコ先輩、目が覚めたんですね？）」

ミーナの声がくぐもっている

ミーナの方に顔を向けるとミーナの顔は晴れ上がり、丸くなっていた

「……クソ…ゴメンよ…ミーナ……」

そう言つとミーナは笑ったのか楽しそうに声を出した

「たいひようふれすよ、こへくはい…いふほもほとれふ（大丈夫ですよ、これ位いつもの事です）」

いつもと言うのは前の奴隷の事であろう

「……ミーナ、どうしてこうなったか説明してくれないかな？」

僕がそう言つとミーナは頷いて話しはじめる

一葉を吹き飛ばした後、日本軍が辺りを囲んでいたと言う事、ミーナが僕を必死に癒している間、双葉と茶癒が抵抗していた事、双葉と茶癒が倒れたと同時に僕を癒しおえた事、そして拳帝と呼ばれるアルウエンが参戦した事を聞いた

「……ゴメンよ…ミーナ……僕が不甲斐ばかりに…そんな傷を………フン！」

鎖をひきちぎった、ミーナが驚いている。まだミーナには話していなかったような気がした

「言つてないよね？僕が魔族出身だって」

ミーナは口を開けたまま何度も首を縦に振った

僕はそれを見てちよつと笑い、ミーナの手錠と足枷をひきちぎ

った

「魔力殺しの牢屋か……魔族の体を考えてないね」

鉄の檻を掴んで曲げる、人一人が通れる位の隙間を作る

「お先にどうぞ、ミーナ」

僕が微笑みかけるとミーナはやつと笑ってくれた

ちよつと気障っぽいかな、僕もミーナに笑顔を向ける、こんな時にでも僕は笑えた

僕にとってミーナは大切な存在だ、もちろん双葉も茶癒も

「……とりあえずここからでしょう、久しぶりに素手で戦うけど……
…大丈夫だよ」

そう言つとミーナは頷く、僕は辺りに気を配る

高い魔力はない、魔法兵士は100程、そして地下一階に魔力が溢れている泉があるみたいだ

「出る前に地下一階魔泉がある、そこで傷と疲れを癒そう」

ミーナはふあいと返事をする、と後ろからトコトコ着いて来る、魔法兵士に見つからない様に慎重に僕は進んで行く

エレベーターは使えないから階段を登る、階段は危険だ。隠れる場所がないから敵と会つたら一撃で倒さなくてはならない

「よし……もう少しだ」

僕は気を引き締める、ミーナはもう戦えない

僕が頑張るしかない

後ろを振り返り誰もいない事を確認すると階段を下りる、音を立てない様に頑張っているのだがどうも素足でも地面に触れる音が響いてしまう

どんな小さな音でも大きく聞こえてその度に心臓が高鳴る
心臓の鼓動の音が耳の中でガンガンなっていた

そして部屋に着くとドアを開けた

「やはり、来たな」

僕は目の前に居た男に目を見開いた

目の前、泉の淵に立っている男が二人

「真君！葉銀君！」

二人がこちらを見てニヤリと笑った

僕は二人に駆け寄って行くと真が僕を葉銀がミーナを担ぎ上げた
そしてそのまま泉に投げ込まれた

「とつとと魔力を補給しろ、運が良かったからなのか……ここは星
の源泉だ。とてつもない魔力が貯まっている」

青く光る泉から魔力が体に染みて行く、普通の泉なら一瞬で吸い
付くしてしまうが…ポコの魔力を全快させた

そう、今古の魔導士の中でも1番魔力が多いポコの魔力を回復
させた

「ふう……全快だよ、これで…ミーナを守れる」

ポコの体から魔力が染み出している、ポコは体を見つめると三
人を見て微笑んだ

「伏せていて、ここ吹っ飛ばすから」

ポコは呪文を紡ぐ古代禁呪の一つを星に属する呪文……魔導と
呼ばれるに相応しい魔法を

「古代禁呪【落日】」

ポコとミリーナの一時（前書き）

初注意：今回はほのぼの系です

ポコとミーナの一時

とにかく、ここを吹っ飛ばしたポコはため息をひとつついて辺りを見渡して伏せている皆に言葉をかけた

「もう大丈夫だよ、みんな」

じと目でにらむ皆……僕そんなに悪いことしたつもりはまったくないのだが

ポコはそんなことを考えていたが無邪気とは思えないと思う、邪気が無いというのだから誰もそこまで叱れないというもどかしさあたりは大きなクレーターとなっていてその中に四人、ぽつりと立っているのはまさに地獄だ

一面、クレーターを除く大地がまっさらな荒野となっている

「殺す気かよ？」

真が首を締めてくる、こっちが殺されそうだ

「だけど……いいの？葉銀君……真君……」

ポコ達の味方をすると言う事は全世界を敵に回すと言う事に相違ないだろう、かつて愛した者、友人、知人たちを相手に戦う、そういうこと

「水臭いぞ、俺は最初からお前たちの味方だ……問題ない」

こっちに外套で目だけ隠された顔が笑っている、真も隣で激しく首を振っている……これで決まりだ。

「僕たちはこれから世界を変える、差別ない世界に……だれも泣かない世界に……その為に……僕は魔王になる」

そんなこんなで僕たちは町に潜伏することになった

「あ、お帰りなさいポコ先輩」

僕らが隠れ家になっている一軒の家に偵察から帰った僕をミーナの笑顔と料理の臭いが出迎えてくれた

「お腹空いたー！今日の献立は何かな？」

ミーナはニコニコして器に料理を盛りながら

「大根のお煮付けとアジの塩焼き…お味噌汁です！」

白い白米と共に僕の目の前に運ばれてくる

腹の虫が早く食わせると文句を言っている

「美味しそう！早く食べよう」

僕とミーナは一緒に食卓に着く手を合わせていただきますと言った

余談と言ったかなんと言うか、僕は髪の毛を茶色に染めて身長を魔法で伸ばし、ミーナは羽を隠し髪を短く切って黒く染めている
これだけでもかなりごまかせる変装となっている

「あ、ミーナ」

僕は思い出した様に口を開いた

ミーナは口をモグモグ動かして器用に首を傾げた

「明日デートしようか」

ミーナは口の中の物をゴクリと飲み込んで百万W a Tの笑顔を僕に向けてくれた

「はい！喜んで行かせていただきます！」

本当に可愛い笑顔だ

「んで、どこに行こうか？」

僕がそう尋ねるとミーナは首を傾げて一生懸命にご飯をかきこみ始めた

あ、食べてから話した方がよかったな

二人共ご飯を食べ終わり、本題に入る

「どこ行きたい？」

「そうですね…バイト代も今月は裕福ですし……映画でも見に行きませんか？ほら、これ！」

ミーナが僕に渡してきた割引券には【恋の魔法陣】と書かれていた

今話題の作品だ

「いいね、行こうか？三回目のデート」

あの日以来僕たちは恋人同士となっていた、とは言ってもまだキスもしてないし手を繋いで歩く位だ

「はい！ボク…嬉しいです！」

ミーナの笑顔には僕の疲れを一瞬で癒す力でもあるのだろう

僕はいろいろと元気になった

「んじゃあもう寝ようか？2時なるよ…ふああ…」

「そうですね、おやすみなさいポコ先輩、私も洗い物したら寝ます」

ミーナはそう言って食器を下げ始める、こう見ると結婚したての夫婦に見えるのかな

「おやすみミーナ」

僕はそんな事は言わず自分の寝室に入る、布団を被るとすぐに眠気が襲って来た

カチャカチャとミーナの食器を洗う音を子守唄に僕は眠りについた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7707d/>

聖ボンガリアル学園リターンズ

2010年10月21日11時52分発行